

③資料作成・公開に関する事業一覧

プロジェクト名	担当部門	頁
情報システムの整備・ホームページの運用（情02）	企画情報部	57
専門的アーカイブの拡充（資料閲覧室運営）（情03）	企画情報部	59
無形文化財に関わる音声・画像・映像資料のデジタル化（無03）	無形文化遺産部	60
国際資料室の整備（セ08）	文化遺産国際協力センター	61
文化財保存修復国際情報データベース化に関する研究（セ07）	文化遺産国際協力センター	62
所蔵目録出版・バーコード化・広報企画事業（ニュースレター・概要・年報）（情05）	企画情報部	63
調査・研究成果の展示公開（黒田記念館）（美06）	企画情報部	65

情報システムの整備・ホームページの運用 (③情02-10-5/5)

目 的

文化財関係の情報を収集し、積極的に発信するために、ネットワーク環境におけるセキュリティの強化及び高速化を進めるなど、情報基盤の整備・拡充を図る。さらに研究所の研究・業務などの広報活動の一環として、ホームページの運用を充実させる。

成 果

1. 情報システムの整備

(1) システム管理

所内におけるシステム管理については、システム管理者がシステム全体の日常的な運用をはじめ、保守契約等の協議、メールアドレスの管理、グループウェアのユーザ管理、コンピュータウイルス対策を行った。

(2) ネットワーク環境の整備

現在のユーザー環境を維持しつつ、より安全で、より高速な情報ネットワークの構築を図るために、Interscanおよび居室内スイッチを更新するとともに、Fire Wallを補強した。

(3) 国立文化財機構間における情報ネットワークの整備

国立文化財機構間におけるネットワークの整備の一環として、機関間グループウェアの運用を開始した。グループウェアの運用開始に際しては、事前にグループウェア「ガルーン2」の説明会を2度開催した。

2. ホームページの運用

ホームページは、研究所の業務に関する情報発信機能の一翼を担う重要なメディアであり、また文化財研究のデジタル・アーカイブとしての役割を果たす。

平成22年度は、文化財デジタルイメージギャラリーを新設し、メールマガジンを配信するなど、ホームページの内容の充実と利便を図った。とくに文化財デジタルイメージギャラリーでは「赤外線的眼で見る《昔語り》」「菊花に覆われた未完の武者絵」「国宝彦根屏風の共同調査」「古写真 名古屋城本丸御殿」を公開し、画像を中心とするデジタル・アーカイブの構築に努めた。

平成22年度のホームページへのアクセス件数は1,489,092件であり、昨年度に比べ約72,000件増加した。

年間ホームページアクセス件数の推移 (今期中期計画実績)

平成22年度	1,489,092件
平成21年度	1,417,203件
平成20年度	1,405,278件
平成19年度	1,526,409件
平成18年度	1,355,306件

平成21年度月別のホームページアクセス件数

・ 4月	125,990件	・ 5月	128,149件	・ 6月	110,074件	・ 7月	121,869件
・ 8月	116,005件	・ 9月	116,081件	・ 10月	128,118件	・ 11月	129,368件
・ 12月	130,303件	・ 1月	137,974件	・ 2月	121,324件	・ 3月	123,837件

③資料作成・公開 Area15,24

平成22年度の更新履歴

更 新 内 容	日本語版	英語版	携帯サイト
活動報告	10	7	10
広報誌	6	12	7
職員の募集	8	0	1
各種研究会の開催	3	1	0
黒田記念館とそれに関する展示	2	1	0
情報システム	2	0	0
公開講座などの催し	4	0	0
資料室の公開	3	1	0
入札	21	0	0
研究成果の展示	1	0	0
研究成果の刊行	2	2	0
コンテンツ	5	0	4
情報発信	3	1	0
合計	70	25	22

研究組織

- 勝木言一郎、綿田稔、土屋貴裕、中村明子（以上、企画情報部）、崎部剛（研究支援推進部LAN委員）、
 俵木悟（無形文化遺産部LAN委員）、犬塚将英、森井順之（以上、保存修復科学センターLAN委員）、二
 神葉子（文化遺産国際協力センターLAN委員）

専門的アーカイブの拡充（資料閲覧室運営）（③情03-10-5/5）

目 的

文化財関連の図書等の文字資料およびアナログ・デジタル画像資料の登録・管理、一般利用者へのそれらの提供、そのためのデータベースや検索システムの構築・運用を行い、質の高い専門的アーカイブの拡充を図る。あわせて、上記アーカイブに必要不可欠である画像形成技術等の継続的な更新を行い、最先端の研究活動を支援することを目的とする。

成 果

1) 資料閲覧室の運営

文化財に関する諸資料の収集・管理・公開・データベースの構築・運用を基本に、より充実したアーカイブ形成に努めた。その一環として、1) インターネット上での公開を目指して朝日新聞社版『日本美術年鑑』のテキスト化を行った。また、2) 劣化が進む資料類の保護対策の一環として貴重雑誌のCD-ROM化をすすめ、本年度は京都市美術館の協力を得て、双方の所蔵する「汎工芸」「美観」をあわせてCD-ROM化の準備を進めた。3) 国内外の関連機関との協力関係構築とへの取り組みと有効な資料公開システム構築のため協議ならびにシステムの改変を行った。さらに、4) 『東京文化財研究所蔵書目録8 漢籍』を刊行した。

2) 画像情報室

他部・センター、他機関との共同調査研究により文化財の画像資料の収集・作成を行った。06年度より文化遺産国際協力センターの協力を得て進めていた尾高鮮之助撮影フィルムのデジタル化を完了した。通常フルカラー画像撮影件数6091件、特殊画像撮影件数1583件（デジタル画像撮影の全体に占める割合100%）

3) 企画情報部にて作成・更新中のデータベース

標記のデータベースには以下の37種がある（作成件数28761件、収録件数973420件、公開件数952909件）。

- | | |
|-------------------|----------------------|
| 1) 所蔵和漢書（～09） | 20) 展覧会（03以降） |
| 2) 受入和漢書（10年度分） | 21) 近現代作家名 |
| 3) 所蔵洋書 | 22) 近現代展覧会開催情報（43以降） |
| 4) 所蔵簡易図書 | 23) 写真原板 |
| 5) 売立目録 | 24) キャビネット写真 |
| 6) 所蔵美術館博物館収蔵目録 | 25) 古美術文献目録（明治～66） |
| 7) 和雑誌誌名 | 26) 近現代美術文献目録（35～90） |
| 8) 所蔵洋雑誌誌名 | 27) 美術館博物館名 |
| 9) 所蔵中国雑誌誌名 | 28) 東京文化財研究所年表 |
| 10) 所蔵韓国雑誌誌名 | 29) 美術研究総目次 |
| 11) 所蔵和雑誌巻号（～03） | 30) 撮影調査票 |
| 12) 所蔵洋雑誌巻号（～05） | 31) 古美術展覧会開催情報（43以降） |
| 13) 所蔵和雑誌巻号（02以降） | 32) 物故者記事 |
| 14) 所蔵洋雑誌巻号（06以降） | 33) 美術懇話会 |
| 15) 所蔵中国雑誌巻号 | 34) 開所記念展覧会出品目録 |
| 16) 所蔵韓国雑誌巻号 | 35) 美術家美術関係者情報 |
| 17) 所蔵地方公共団体刊行報告書 | 36) 画廊情報 |
| 18) 所蔵香取秀真資料関係 | 37) 美術史論壇 |
| 19) 展覧会（02まで） | |

③資料作成・公開 Area16

4) インターネット公開中の研究資料検索システムに提供中のデータベース
標記のデータベースには以下の15種がある。

- | | |
|----------------|-------------------|
| 1) 美術関係図書 | 9) 画廊資料 |
| 2) 伝統芸能関係図書 | 10) 美術関係文献 |
| 3) 保存修復関係図書 | 11) 『保存科学』 所載文献 |
| 4) 売立目録 | 12) 伝統芸能関係三雑誌所載文献 |
| 5) 展覧会カタログ | 13) 『美術研究』 総目次 |
| 6) 和雑誌 | 14) 近現代美術展覧会開催情報 |
| 7) 写真原板 | 15) 伝統楽器情報 |
| 8) 美術家・美術関係者資料 | |

5) 図書受入数

和漢書764件、洋書33件、展覧会図録・報告書等4174件、雑誌1893件（受入総数6864件）
37種の目録所在情報

6) 資料閲覧室の利用状況

公開日総数135日、利用者年間合計1017人

研究組織

○津田徹英、田中淳、山梨絵美子、勝木言一郎、塩谷純、綿田稔、皿井舞、江村知子、土屋貴裕、城野誠治、
中村節子、中村明子、井上さやか、鳥光美佳子（以上、企画情報部）

無形文化財に関わる音声・画像・映像資料のデジタル化（③無03-10-5/5）

目 的

無形文化遺産部では、旧芸能部時代から、文献資料のほかに、音声・画像資料を積極的に収集してきた。これらの記録は極めて貴重であるが、記録メディアの進展に伴って、より好環境のもとに保存してゆく必要がある。このため無形文化遺産部では、画像・音声・映像資料の媒体転換を進めてきたが、将来的には、デジタル化された各種資料の集積によって、デジタル・アーカイブの開設を目指している。

成 果

本年度は、これまでに蓄積されてきた資料に加え、平成17年度までに寄贈を受けたアナログテープの媒体転換を中心に実施した。とくに、新たに受入れが完了した音声記録に関しては、これまでの資料を補完する分野に重点を置き、デジタル化を進めると同時に、デジタル化音声資料へのインデックス付与も行った。また、無形文化遺産部に平成20年度に寄贈された歌舞伎舞台写真の整理を行い、調査の完了したモノクロネガに関しては所蔵一覧を公表した。

研究組織

○宮田繁幸、高桑いづみ、飯島満、俵木悟、菊池理予、金子健、綿貫潤、星野厚子（以上、無形文化遺産部）

国際資料室の整備 (③セ08-10-5/5)

本プロジェクトは、国際資料室に配置する外国の文化財や文化財保存修復事業に関する蔵書・資料の質及び量を充実させ、文化遺産国際協力センターでの関連の研究や事業に利用するとともに、国内外の関連分野の専門家が閲覧・利用できるようにする。同時に、資料のデータベース化を行い、利用者の便を図る。

1. 資料の収集とデータベース化

目 的

文化財自体やその保存修復、機関・組織・法令などの保護制度、文化財の公開と活用、危機管理などの分野の書籍や報告書、会議録、地図など、文化財保護に関する資料や、文化財保存修復国際協力を行ううえで参考となる関連諸学に関する資料を収集する。資料の収集は本プロジェクトだけでなく、他のプロジェクトとも連携して行い、特にプロジェクトの対象とした地域については、現地語による資料も含めて重点的に収集を行う。また、利用者の利便性の向上及び資料の適切な管理のため、収集資料のデータベース化を行う。

成 果

今年度はインド、インドネシア、中国、タイ、中央アジア諸国などの文化財に関する資料及び世界遺産、保存科学、文化財保護制度などに関する書籍1087点(和漢書555点、洋書532点)、雑誌104点の資料を収集し、データベース化した。

2. 『国際資料室蔵書目録』の作成

目 的

今年度データベースに入力した図書および雑誌について、蔵書目録を作成する。

成 果

2011(平成23)年3月に、今年度に国際資料室で受け入れてデータベース化した1087点(和漢書555点、洋書532点)の資料、及び国際資料室で所蔵する雑誌456種類を掲載した『国際資料室蔵書目録』を発行した。

目録作成数 1件

・『国際資料室蔵書目録』

研究組織

○二神葉子、清水真一、岡田健、山内和也、朽津信明、友田正彦(以上、文化遺産国際協力センター)

文化財保存修復国際情報データベース化に関する研究 (③セ07-10-5/5)

世界各地の文化財及びその保存修復に関する情報を収集・整理し、調査研究に活用するとともに、関連分野の専門家に対して効果的に発信していくことを目的にデータベースを作成する。

また、文化遺産国際協力センターでこれまでに実施してきた事業の成果をデータベース化して公開する。

1. 情報の収集とデータベース化

目的：世界各地、特に現在文化遺産国際協力センターで調査研究の対象としている地域に関連して、文化財やその保護の状況に関する総合的な情報を収集する。

成果：平成13年度から収集を行っている世界各国の文化財保護に関連する法令について、法令を収集するとともに、日本の文化財保護法で用いられている分類を手がかりとして、各国の法令が対象とする文化財による分類を行い、データベース化を実施した。

2. 情報の発信

目的：文化財保存修復や国際協力事業に携わっている専門家を対象に、文化遺産国際協力センターが行っている調査研究などの事業に関する成果を公開する。

成果：これまでに和訳した世界各国の文化財保護に関連した法令の条文についてPDF化を行い、ウェブサイト公開している。印刷物としては、まず、タジキスタンの法令についてロシア語から和訳し、『文化財保護関連法令シリーズ[10]』として印刷・出版した。また、フランスの『文化財法典』の和訳のうち後半部分を『文化財保護関連法令シリーズ[9-a2]』として出版した。さらに、ブータンの文化財保護関連の法令2件を和訳した。法令の翻訳にあたっては、原語に忠実で説明的な直訳を心がけることで、日本語の類似の制度などとの混同を避ける工夫を図っている。

また、文化遺産国際協力センターのウェブサイトで、最新の出版物の目次やプレスリリース等を掲載することで、研究成果を公開している。

3. 文化財データベースに関する調査

目的：各国の文化財に関するデータベースの構造や活用の事例について関係機関への調査を行うことで、文化財データベースの構築・改善に寄与する。

成果：オーストリアの文化財保護に携わる国立の機関である、Bundesdenkmalamt（連邦記念物局）の専門家に対して、不動産文化財のGISデータベースについて聞き取り調査を行った。オーストリアは、連邦の文化財保護法が存在し、単体の不動産文化財の保護は連邦が管轄するなど、近隣のドイツのような連邦制の国と比べて連邦の権限が強く、文化財保護制度の面でも興味深い。2010年に文化財インベントリーを完成し公開するとの方針が出されていたことから今回の調査を行った。連邦記念物局ではフランスなどデータベースを構築済みの国について情報を集めたが、そのまま応用可能なものがなかったため、現在独自のシステムを構築しているところで、2011年の公開が目標とのことである。なお、文化財保護法の改正も予定されていることから、今後も調査を継続する。

刊行物 3件：『各国の文化財保護関連法令シリーズ [9-a2]フランス文化財法典（後編）』、『各国の文化財保護関連法令シリーズ [10]タジキスタン』、『各国の文化財保護関連法令シリーズ [11]ブータン』

研究組織

○二神葉子、清水真一、岡田健、山内和也、朽津信明、友田正彦、今井健一郎（以上、文化遺産国際協力センター）

所蔵目録出版・バーコード化・広報企画事業（ニュースレター・概要・年報）（③情05-10-5/5）

目 的

『年報』『概要』『ニュース』など広報3誌の編集・刊行は、研究所が進める広報活動の中核に位置づけられる。それらの目的は、媒体に応じて、調査・研究、国際協力の推進、調査研究成果の発信、協力・助言など、研究所が担うさまざまな活動を、対外向けに情報発信することにある。またそれらのデータはホームページ上でもPDFファイル形式で配信されている。

成 果

(1) 『年報』2009年度版の刊行

2009年度版の構成は従来通り、「機構」「年度計画及びプロジェクト報告」「その他の研究活動」「個人の研究業績」「研究交流」「主な所蔵資料」「研究所関係資料」「東京文化財研究所プロジェクト索引」とした。2009年度版の編集は年報編集委員会の協力を得て進められ、2010年5月31日に刊行された。

(2) 『概要』2010年度版の刊行

2010年度版は構成を見直し、「組織」「職員一覧」「東京文化財研究所の役割」「各部・センターの紹介」「調査と記録」「多様な文化財の概念」「文化財に関わる材料と技術」「環境と文化財」「修復する」「壁画の調査研究と保護」「日本から世界へ」「文化財アーカイブの役割」「“人”を育てる」「連携・交流・公開」「情報発信」「刊行物」「資料」と改めた。またその割付は従来通り、日英2カ国語を併記し、図版を多用した。

(3) 『東文研ニュース』の刊行

『東文研ニュース』の第41号-第44号の刊行

『東文研ニュース』の構成は従来通り、四半期ごとの活動報告、コラム、刊行物の案内、新人紹介、人事異動、案内などとした。編集は東文研ニュース編集委員会の協力を得て進められた。平成22年度の実績は下記の通りである。

No41 全16頁 2010年5月31日発行

No42 全16頁 2010年8月31日発行

No43 全16頁 2010年11月30日発行

No44 全16頁 2011年3月31日発行

また『東文研ニュースダイジェスト』（『東文研ニュース』英語版）第8号～第9号を刊行し、海外の読者向けに情報発信を進めた。

毎月、『活動報告』(Monthly Report)をそれぞれ日本語版・英語版のホームページ上に掲載するようにし、速報性の確保に努めた。また『活動報告』中国語版を新設し、情報発信の多言語化を図った。

(4) 子供向けパンフレット『東京文化財研究所ってどんなところ』の刊行

2009年度に引き続き、子供向けパンフレット『東京文化財研究所ってどんなところ？』の改訂版を刊行し、小学校児童・中学校生徒を対象にした文化財情報の発信に努めた。子供向けパンフレットもPDFファイルのデータとして、ホームページ上からダウンロードできるようにした。

③資料作成・公開 Area19

(5) 広報誌の配布

広報誌は、文部科学省・文化庁各部局、都道府県教育委員会、国および都道府県の美術館・博物館、埋蔵文化財センター、文化財研究部門をもつ大学図書館、大使館、友好協会などに配布した。

従来、黒田記念館や研究所受付・資料閲覧室における広報誌の配布に加え、『東文研ニュース』を東京国立博物館、京都国立博物館、奈良国立博物館、九州国立博物館、大分県立歴史博物館、東京芸術大学美術館、そして奈良文化財研究所へ、また子供向けパンフレットを台東区立小学校・中学校へ配布してきたが、一般者向けの広報をより一層強化するため、諸施設に対し、『概要』『東文研ニュース』および子供向けパンフレットの配置、配布を依頼した。

2010年度に配布の依頼を行った施設は、東京国立博物館、国立西洋美術館、上野の森美術館、国立科学博物館、国際子ども図書館、東京文化会館、上野動物園、東京都上野公園管理事務所、東部公園緑地事務所、国立東京近代美術館、東京都写真美術館、東京都現代美術館、貨幣博物館、日本大学文理学部資料館、多摩美術大学美術館などである。

(6) 『独立行政法人国立文化財機構概要』2010年度版の編集協力

独立行政法人国立文化財機構の発足に伴い、『独立行政法人国立博物館概要』が『独立行政法人国立文化財機構概要』（以下『機構概要』）に改められた。そのため『機構概要』にも東京文化財研究所の紹介記事が掲載されることとなり、その編集を協力した。

(7) パネル展示の調整

研究所1階エントランスホールにおける研究成果の展示に関し、調整を進め、下記の通り実施した。

2010年3月5日～2010年7月19日

「日中共同唐代陵墓石彫保護修復プロジェクト」（文化遺産国際協力センター）

2010年7月20日～2010年3月28日

「国宝高松塚古墳壁画の劣化原因調査」（保存修復科学センター）

2011年3月29日～

「無形文化遺産の記録」（無形文化遺産部）

(8) 台東区立上野中学校におけるパネル展示

10月30日、台東区立上野中学校の空き教室を借用し、学校行事にあわせた展示を行った。展示は、中学校との協議を経て、過去に当研究所1階エントランスで行ったパネル展示「X線透過撮影による能管・龍笛の構造解明」と「X線透過撮影による仏像の調査・研究」を再構成した。参観者数は教職員、生徒、保護者など300名であった。

(9) ピクチャーレールの設置

画像情報室前の廊下にピクチャーレールを設置し、研究成果の公表のための便宜を図った。

研究組織

○勝木言一郎、田中淳、津田徹英、塩谷純、山梨絵美子、綿田稔、皿井舞、江村知子、土屋貴裕、城野誠治、中村節子、中村明子、井上さやか、鳥光美佳子（以上、企画情報部）

調査・研究成果の展示公開（黒田記念館）（③美06-10-5/5）

黒田記念室は、当研究所の創設に深く関わった帝国美術院長子爵黒田清輝の功績を記念するために設けられた陳列室であり、黒田清輝の油彩画、素描、写生帖等を収蔵公開している。

創立当時、主として黒田家から寄贈されたものは、油彩画125点、素描170点、写生帖等であるが、その後黒田照子夫人、樺山愛輔、田中良氏等からの寄贈が加わった。収蔵品の主なものは、「湖畔」「智・感・情」（以上2作品は、国指定重要文化財）「花野」「赤髪の少女」「もるる日影」「温室花壇」などである。

2001（平成13）年1月より、2階部分の改修工事が行われ、従来の黒田記念室に加え、会議等に使用していた陳列室も展示室に改修、2室がギャラリーとなり、黒田清輝の作品を約50点の展示が可能になった。また、旧美術研究所所長室に美術研究所時代の写真を展示し、パーソナルコンピューターを設置し、来館者がホームページを閲覧するコーナーとして公開した。2002（平成14）年9月からは、土曜日も公開日に加えた。2003（平成15）年度は7月から9月にかけて改修工事を行い、エレベーター等の設置により施設のバリアフリー化をはかった。また同年度10月から記念館1階に黒田清輝作品の絵はがきや図録等、記念館のグッズを委託販売するコーナーを設けた。2008（平成20）年度からは記念館1階の旧研究室で美術研究所時代に使用された家具、資料を展示するとともに、2階の一室で、黒田清輝に関するスライドショーを実施した。

研究成果展示として、黒田家遺族から受贈した黒田清輝関連写真の調査研究の成果の一部として「写真で見る黒田清輝の日常」と題するデジタルコンテンツを作成し、記念館1階にあらたに設置した64インチ大型タッチパネル上で公開した（11月3日公開開始）。

・一般公開（無料）：毎週木・土曜日 午後1時～4時、特別公開：2010（平成22）年11月3日～11月7日、入場者数 18,458人（2010年4月1日～2011年3月10日）

なお、黒田記念室のパンフレット（A4サイズ、三つ折）を作成し、来館者に無料で配布した。

2011年2月24日から3月10日まで、来館者にアンケートを実施した（19日まで実施予定であったが、3月11日に発生した東北地方巨大地震により12日から休館）。来館者917人のうち、156人の回答を得た。回答率は17.0%で、そのうち「満足した」「おおむね満足した」と回答してものは155人（99.4%）、「不満が残った」1人（0.6%）であり、アンケート回答の99.4%が満足感を得たことになる。

・地方共催展：当研究所は、黒田清輝の功績を記念し、あわせて地方文化の振興に資するため、1977（昭和52）年から「近代日本洋画の巨匠 黒田清輝」展を年1回各地で行ってきた。2007（平成19）年4月に独立行政法人文化財研究所と独立行政法人国立博物館は統合し、新たに独立行政法人国立文化財機構が設置され、黒田記念館及び所蔵作品は、東京国立博物館に移管されたが、黒田記念館の運営と共催展の開催は、当研究所の事業として継続している。平成22年度地方共催展は下記のように開催した。

会場：岩手県立美術館、会期：2010（平成22）年7月17日（土）～8月29日（日）

主催：東京国立博物館、東京文化財研究所、岩手県立美術館、黒田清輝展実行委員会

開催日数：28日、入場者：11,942人

陳列点数：油彩・パステル画85点、素描62点、写生帖17冊、書簡4通、日記5冊、参考出品2点、記録写真16点、特別陳列（油彩2点、素描3点）（以上、黒田記念館所蔵作品） 図録：A4版変形、182ページ

会期中の2010（平成22）年8月1日（日）、会場出口において来館者にアンケート調査を実施し、280人から回答を得た（入館者数300人に対して、回収率93.3%）。満足度として「満足」、「おおむね満足」の回答が、100%をしめた。

研究組織

○田中淳、山梨絵美子、塩谷純、綿田稔、皿井舞（以上、企画情報部）